

# バナナと氷河の国・ウガンダ

写真・文  
船尾 修  
Osamu Funao



バスターミナル周辺には、乗客をあてこんでさまざまな物売りが出没する。すぐに食べられるマンダジ（ドーナツ）などのスナック類や果物が多く、少年が従事していることが多い

数年前にウガンダを訪れた際、水田を見に行った。アフリカで水田？と思われる方も多いただろうが、意外なことにアフリカではお米の需要が急増しており、それに伴って稲の作付面積も増えているのである。市場へ行くと、国産米だけでなく、パキスタンやベトナムから輸入されたお米が、山積みされているのを見ることが出来る。JICAも水田の指導や、西アフリカ生まれで収量が高いことで知られるネリカ米の導入などで協力を行なっている。

街の大衆食堂に入ると、主食としてライスの他、サツマイモとマトケと呼ばれるマッシュしたバナナを同時に出されることが多くなった。初めて私がウガンダを旅したのはもう二〇年以上も前だが、そのころは食堂に入ると黙っていてもマトケを出された。これは栗金団のような味と食感で、おいしいものではあるのだが、喉に詰まる感じがあってたくさんは食べられない。お米が主食の日本人だからそう感じるのかと思っていたが、現在のお米の受け入れられ方を見ていると、ウガンダ人も案外お米のほうが好きかもしれない。

しかしこの現象は首都のカンパラに限ったものである。地方の市場へ行くと、そこはもうバナナのための世界といえる。それもまた青い調理用のプランテン・バナナ。一〇〇本ほどが連なった塊がひとつの単位で売られている。そういう塊が山積みされている光景は壮観だ。ウガンダのイメージ





自転車に目いっぱいバナナの房をくくりつけて客を待つ男。午前中に切り出してきた後は、買い手が現れるまで気長に待つのがアフリカ流



ウガンダ東部に拓かれた水田。もともとは中国の支援によりつくられたということだが、現在では日本のJICAが生産高を上げるために支援を行っている

大衆食堂で食事をするウガンダ人のカップル。ライスにキャッサバ、マトケ、サツマイモの主食に、鶏肉や豆、野菜のソースをつけて食べる



は？と問われたら、私は躊躇なく「バナナ」と答える。それほどバナナは彼らの生活に溶け込んでいて、結婚式などのハレの舞台があると、バナナを発酵させた酒が振る舞われる。これはバナナを噛んで唾液と混ぜたものを樽に入れて発酵させてつくる。ある人は、「結婚前の少女が噛んだものでつくった酒が最上級なのだ」と真顔で話してくれた。ワラギというブランドの蒸留酒もバナナからつくられ、これはエンテベ空港の売店でも売られているほどポピュラーなものだ。

ウガンダをバスで旅するのはとても楽しい。沿道に切れ目なく続く植物の緑が目染み入って、飽きることがないからだ。バナナ畑も集落のあるところでは必ず見ることができ、薄紫色の尖った花芯をつけたバナナの木。そういえば、以前にルウェンゾリ山の山麓でガイドにバナナの木の花雄の見分け方を教わったのだが、「どうしてわからないの？」と呆れられたことがある。今でもどうしても見分けがつかない。

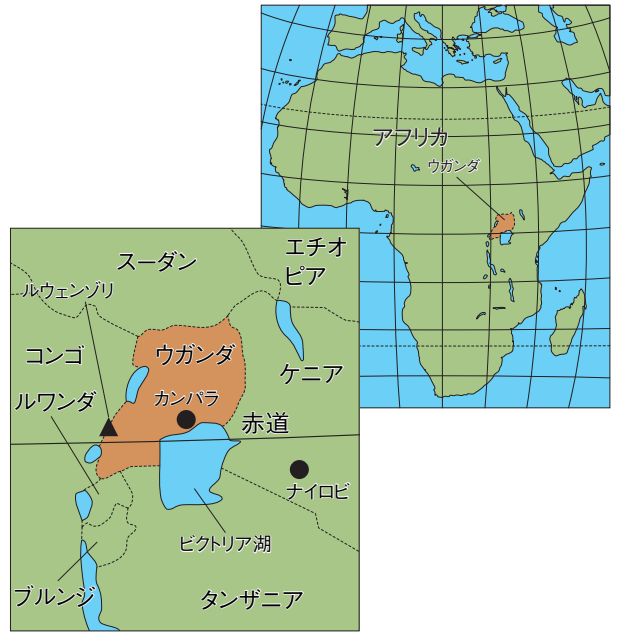
村や町で停車するたびに、物売りたちがどっと押し寄せる。串焼きの肉や、マンダジと呼ばれるドーナツ、策に入ったピーナツ、そしてここでもバナナ……。こちらは皮を剥いたらすぐ食べられる黄色くて甘いバナナであるが、売り子とのやり取りがまた楽しい。もちろん値切ること可能だ。

しかし平和そのものといえるウガンダのバスの旅は、昔からそうだったのではない。





アフリカ第3の高峰ルウェンゾリ山に登るには、ポーターやガイドたちの助けが必要である。彼らは山麓に住むバコンジョ人で、ふだんはバナナやキャッサバを育てながら暮らす農民である



ルウェンゾリの最高峰スタンレー山塊。右奥に見えるのがアフリカ第3のピーク・マルガリータ峰。5,109メートル。頂上付近に残る氷河はここ100年間で約80パーセント後退したといわれている



ルウェンゾリとは地元のバコンジョ語で「雨の山」という意味。それほど年間を通して降雨が多い。登山ルートは時には雨とぬかるみで、たいへんな労力を要す

私が初めてウガンダを訪れたころ、かの有名な「敵を粛清して食べた」と噂されたアミン大統領が軍事政権を樹立して以降、クーデターが頻発し、政治的・経済的に混沌とした時代が長く続いていた。

私が旅したのはそういう暗い時期で、首都カンパラは停電が続き、ビルには生々しい弾痕が残り、少年兵が民間人を銃で脅す姿があちこちで見られたものだ。シリング貨の貨幣価値は下落を続け、公定レートの一〇倍もの値でドルが取引されていた。旅行者の身してみれば闇両替によってリッチな旅ができるはずだったが、いかにせん商店には買えるようなものが何も並んでいなかった。

ウガンダにはアフリカ第三の高峰ルウェンゾリがそびえ、私はこの山に登るためにやってきたのである。一九世紀にヨーロッパ人が地理的空白部を求めてアフリカを探検した時代、氷河をもつルウェンゾリは「月の山」と呼ばれ、ここがナイル川の源流ではないかと想像されていた（後に証明された）。

未知の山に登ることに青春の情熱を傾けていた当時の私は、まだ日本人の足跡がほとんどないこの山に惹かれていた。アラン・ムアヘッドが著した『白ナイル』という本を何度も何度も読み返して、まだ見ぬ白い頂に思いを馳せていたのである。

ところが、ようやく入山手続きできたものの、食料が入手できなかった。干した川





校庭にある大木を遊び場にするウガンダの小学生。イギリス風にきちんとネクタイを結び制服を着こなす子どもも多い。近隣国と比べてもかなり英語教育は普及している



緑の国ウガンダでは、コーヒーやバナナだけでなく、お茶の栽培も盛んだ。勤勉な性格のため、良質なものが得られるという。経済発展のポテンシャルの高さはこんなところにも見ることができる



ウガンダは赤道直下の国。赤道の標識が立てられたところでは、インストラクターが洗面器の水を使って、北半球と南半球では「コリオリの力」によって渦巻きが逆になることを実演してくれる。もちろん有料である

魚、ウガリ（トウモロコシ粉を湯で練った主食）、ピーナッツぐらいを手に入れるのがせいぜいだった。砂糖もチョコレートもなかった。そのせいにするつもりは毛頭ないが、連日の悪天候に阻まれて登頂は逃した。ルウェンゾリが現地のバコンジヨ語で「雨の山」と呼ばれているほど天候が不安定なことを、ずっと後になって知ることになる。

その後、首尾よく登頂することができたが、撮影や取材で再訪するたびに、この国は輝きと安定を取り戻しつつあるように感じた。アミン時代に追放されたインド系の人たちが再びウガンダに戻って、経済発展も順調だ。かつて「アフリカの真珠」と呼ばれたころの美しさは急速に回復しつつある。

東アフリカをリードした昔のブガンダ王国の誇りある伝統のためか、ウガンダ人はたいへん礼儀正しく、温和でおとなしい性格の人が多い。まだまだ日本からの旅行者は少ないが、湿地帯に集まるさまざまな鳥類を観察するバードウォッチングや絶滅危惧種のマウンテンゴリラを見るために、世界各地から好事家たちが集まってきている。水河から湿地帯までの自然の多様性や、プライドある人たちの存在は、この国が今後発展していく可能性を大いに示していると思う。

（ふなお おさむ／写真家）